

ボランティア OSAKA

第4号

'96/WINTER

特集

若者たちのボランティアは、いま
座談会 学生ボランティア活動の現状と今後の課題



高石ともや

●発行●

(福)大阪府社会福祉協議会
大阪府ボランティアセンター

感動と連帯の輪 広がる…

第4回 おおさかボランティアフェスティバル



「春待ちファミリーBAND」の演奏



大阪のボランティア・パワーを結集し、活動の輪をよりいっそう広げようと、昨年12月2日（土）、第4回おおさかボランティアフェスティバルが開かれました。

保育園児たちのかわいい遊技で幕を開けた、このフェスティバル。高石ともやさんのトークライブなどの「つどい」、8つのテーマに分かれボランティア活動全般について話し合った「交流会」、料理教室やビデオ上映や展示・即売などが行われた「ひろば」という3つの柱をメインに、さまざまな催しが繰り広げられました。

とくに午後からスタートした交流会では、学校教育・朗読・手話・在宅福祉・企業ボランティア・介護用品と自具・環境保全・阪神大震災をそれぞれのテーマに、ボランティア活動の大阪における現状と今後の課題を、話し合いの中で明らかにしていきました。

例えば、交流会の一つである「学校教育とボランティア活動の新しい風」では、ビデオを取り入れた活動報告、報告者からのワンポイントメッセージなどがあり、参加者もとても分かりやすかった様子。参加者からは「幼いときからボランティア活動に親しむことは、生命の尊重・思いやり、ひいてはいじめをなくすことにもつながると痛感しました」といった声があがっていました。また、「在宅福祉活動とボランティア」は、参加者が約100名と多く、立見の人も出る状態。現在取り組んでいる活動や問題点（活動の行きづまり、宗教問題、有償・無償の問題など）が参加者から次々に出され、活発な意見交換が

交流会



●視覚障害者と朗読ボランティア



●聴覚障害者と手話サークル



●企業の社会貢献とボランティア活動



●在宅福祉活動とボランティア



●学校教育とボランティア活動の新しい風



●手作り介護用品・自助具とボランティア



●あなたもできる環境保全



●阪神大震災を振り返って



ボランティア活動の作文を発表する田中晶子さん(6年生)



平成7年度大阪府社会福祉ボランティア知事表彰を受けた個人・団体(五十音順)

- 【個人】 石川秀子・伊藤智子・入川佳津・岩田薫／信子・桂志奈子・北原タカ・木脇ユリ・小林ひろみ・清水靖代・祖母井律子・多田礼子・寺田良子・中村律子・西島重雄・花井佳江・濱野ノブ子・堀基早・松本弘・實樹久子・森智恵子・山下まり子・若松みどり・和田年弘
- 【グループ】 大阪手話サークル連絡会・大阪大学ボランティアサークル「フロンティア」・音訳グループ「とも」・介護ボランティア「ほほえみ」・ガイドヘルパー「一歩の会」・交野市手話サークル「さつき」・高陶会・手話サークル「アゼリア」・手話サークル「にじ」・新星・たんぽぽの会・地域ボランティアグループ「ありの会」・点訳ボランティア「あゆみ」・豊中市社協登録ボランティアグループ「小さな手」・ふきのとう・ボランティアグループ「コスモス」・麦の会・リハビリ介護ボランティア「なかま」
- 【協力校】 吹田市立吹田第二小学校・豊中市立第十八中学校・豊中市立東豊台小学校
- 【企業】 大阪ガス(株)・(株)月華殿
- 【労働組合】 ゼンキン連合大阪・全国電気通信労働組合近畿地方本部

展開されました。

交流会終了後は、参加者全員がメイン会場に集まり、それぞれの交流会での話し合いの結果を発表。多くの人がボランティア活動に対する確かな手応えを感じました。

その後、高石ともやさんのリードにより、「あかとんぼ」を全員で合唱。大きな感動に包まれ、フェスティバルの幕を閉じました。

なお、ボランティアフェスティバルで、大阪府知事のボランティア表彰を受賞した方々は次のとおりです。

座談会

昨年の阪神・淡路大震災では、多くのボランティアたちが被災地の人々を支え、多彩な救援活動を展開しました。とくに震災直後には、全国から駆けつけた多数の学生が、物資の仕分けなどのボランティアに参加。大阪府社協のボランティア保険加入者を対象にした震災ボランティアの活動調査を見ても、学生の割合は全体の3割以上を占め、うち大学生は6割に上っています。

このように震災で一躍注目されるようになった学生ボランティアですが、震災以前から福祉の分野を中心に地道な活動を続けてきたボランティア・サークルも一方では少なくありません。そして、震災時・平時を問わず、こうした学生たちによるボランティア活動は、暗いニュースが多い昨今、キラリと光る明るい希望と可能性を社会に与えてくれたといえます。

そこで今回は、そんな学生ボランティアの現状と課題について、関西5大学から6つのボランティアグループの代表者に集まってもらい、さまざまな角度から話し合っていました。

学生ボランティア活動の

現状と今後の課題

若さあふれる
今だからこそ、
できることがある



【出席者】

- ◆大阪市立大学（関西福祉系大学救援グループ事務局）
堺 豊史さん（生活科学部人間福祉学科3回生）
- ◆大阪府立大学手話サークル「亜飛夢（アトム）」
杉山義幸さん（社会福祉学部1回生）
- ◆近畿大学文化会社会福祉すみれ会
吉田太郎さん（理工学部建築学科2回生）
山口貴行さん（商経学部経営学科1回生）
- ◆花園大学ボランティア情報広場
蜂谷俊隆さん（社会福祉学部社会福祉学科4回生）
- ◆桃山学院大学ボランティアサークル「むうみん」
三和美智代さん（社会学部3回生）
- ◆桃山学院大学（関西福祉系大学救援グループ）
木村正雄さん（社会学部4回生）
井川満裕さん（社会学部4回生）

【司会】

- ◆大阪市立大学生活科学部人間福祉学科教授
秋山智久さん

福祉に、震災に、地道な活動を展開

（手話や点字で
障害者と交流）

秋山 昨年の大震災では、その活躍ぶりが大いに注目された学生ボランティアですが、各大学には平素から地道に活動を展開している



グループも少なくありません。そこで、まずは福祉関係のボランティアに取り組んでいるグループの活動内容についてお伺いしたいのです。

吉田 近畿大学文化会社会福祉すみれ会では、視覚障害児へのボランティアを行っています。主な活動内容は、視覚障害児とのサマーキャンプやクリスマス会の実施、国立神戸視力障害者センターや市立盲学校との交流会など。本の点訳も行っています。現在、会員数は1・2年生を中心に22人です。

杉山 手話サークル「亜飛夢（アトム）」は、大阪府立大学のボランティアグループです。社会福祉部の学生が多く、会員は1・2年生合わせて50人。女子学生が若干多いですね。会員たちで手話劇や手話コーラスを上演し、聴覚障害者に楽しんでもらうほか、堺市内にある聾学校や地元の手話サークルとの交流会なども行っています。

三和 桃山学院大学のボランティアサークル「むうみん」で活動しています。このサークルは昭和54年に結成され、現在、会員は1年生から4年生までの54人。月に1回、知的障害者（児）とハイキングに行くなどレクリエーションを行うほか、週に1回、堺南通所授産施設のデイサービスのボランティアにも参加。肢体不自由の人た

ちとのおしゃべりを楽しんでいます。



◆三和美智代さん
桃山学院大学ボランティアサークル「むうみん」（社会学部3年生）

（震災後、団体間の
情報交換も活発に）

秋山 次に、震災を契機に結成されたグループの紹介をお願いします。

木村 桃山学院大学では、震災直後、170名の有志によってボランティアグループが結成され、現地での救援活動にあたってきました。大学の移転に伴い、震災時の活動は2月でいったん終了。夏休みに再び有志を募り、100名で再スタートを切りました。現在は被災地の仮設住宅にある「ふれあいセンター」の運営に、その住民たちと一緒に携わっています。

堺 市大の社会福祉学研究室では、関西福祉系大学救援グループ（関西9大学）の事務局として、活動を展開してきました。この座談会に出席しておられる桃大さんや花園大さんも、救援グループの支部として活動してこられたわけです。私たちは現地で主に動いてきましたが、3月末で活動は終了し、以後は月1回開催される救援グルー

プの会議を通し、今後の方向性について検討を重ねています。

蜂谷 花園大学では震災以前から個人のボランティア活動を支える連絡の場をつくりかけていたのですが、震災を契機にネットワークが急速に固まり、4月6日まではネットワークに集まった学生たちで震災の救援活動を展開してきました。以後は、せっかくできたネットワークをより長く維持したいとの思いから、9月に花園大学情報広場を発足。震災関連以外でも学内のボランティアたちが集まる「情報交換の場」として機能し、他大学との連携も深めています。運営の中心となっているメンバーは20人ほどです。



◆蜂谷俊隆さん
花園大学ボランティア情報広場（社会福祉学部社会福祉学科4年生）



活動上の課題は、資金・専門性・仲間の確保…

自己申告制で 交通費等を援助

秋山 以上、簡単に構成員や活動内容について語ってもらったわけですが、次に各サークルが抱える課題についてお聞きしたいと思います。なお、参考までに申し上げますと、府社協と市大では共同で震災ボランティアの活動調査を行い、昨年12月に『震災とボランティア』と題する報告書を完成しました。そのなかでグループにおける活動上での問題点についても調査しましたが、そこで大きな割合を占めたのが、「活動資金が少ない」

(67・9%)ということ。震災ボランティアでは、確かに最初の頃はボランティアたちによる出費が多く、緊急時のボランティアにも速やかに対応できる資金制度の必要性を痛感しました。それはともかく、資金の問題はグループが活動を継続していく上でいつも大きな問題ではないかと思うのですが、皆さんのところではどうですか。

井川 桃山の学生ボランティアグループは大学からのバックアップがあり、資金面ではそれほど問題はありません。ただ、学生の中には「ボランティアするにはアルバイトをして資金を稼がなくてはならない」という者もいたことは確か。僕はグループの事務局長をして

いますが、「救援に行きたいけど、先立つものがない」と泣きついてきた学生もいた。その学生には、とりあえず僕のポケットマネーから当面の費用を立立てました。もちろん、「ちゃんと返してや」と付け加えて(笑)。でも、全体にはボランティアなんだから、多少の出費は覚悟しているという学生が多かった。後日、交通費などの出費については自己申告の形で精算しましたが、「お金はいらない」「援助資金として活用してください」という声も多く返ってきましたから。

苦しい資金繰り。でも、 制約は受けたくない

蜂谷 桃大さんと違って、僕たち

のネットワークは、大学側からの制約を受けずにあくまでも学生の自主的な活動として推進していき

たかったのが、大学からの援助は受けていません。市民団体のネットワークである京都NPO連絡会から補助金をもらっているほかは、イベントなどを実施した際に寄せられたカンパで何とかやってきましたが、震災への意識が薄れていくなか、これからはどうやって資金集めをしようか、思案をめぐらしています。

三和 私たちのサークルも大学の認可を受けていないため、部費が出ず、厳しい資金繰りが続いています。設立当初、先輩たちが大学からの制約を受けないために、あえてそういうふうになされたそうですが、やはり「交通費がかかるから、ボランティアに行けない」という学生もいる。今までは堺市社協から助成金をもらったり、先輩からカンパを募ったり、部員から費用を集めて何とかやってきましたが、公のバックアップもほしくない、とも思っています。

秋山 今の言葉に、制約を受けたくないけど、資金援助はほしいというジレンマがよくあらわれていますね。ボランティア活動というのは、自分のお金で、また自分のできる範囲内であるのが、本来の



◆木村正雄さん
桃山学院大学(関西福祉系大学救
援グループ)(社会学部4回生)



◆杉山義幸さん
大阪府立大学手話サークル
「亜飛夢」(社会福祉学部1回生)





施設のお祭りに参加する桃山学院大学「むうみん」のメンバーたち

姿では…。例えば、非常に活発に活動している大阪ボランティア協会では、全予算の内の3分の1しか公の援助は受けないという方針で、長い間やってきています。それ以上の援助を受けると、活動に制約が生じるという理由からです。三和 でも、ボランティアするためにはアルバイトをしなければならぬという現実がある以上、学生のボランティア活動にもう少し経済的ゆとりがほしいのは確かです。堺 営利を追求するのではなく、個人がもっているボランティアに

対する考え方を見失わない限り、いろんなボランティアに対する考え方が存在しているのではないかなと思うんですが…。井川 僕もそう思います。交通費など費用はいつさい負担する人もいれば、交通費などはもらいながらボランティアを続けていく人もいます。それは、それぞれのボランティアに対する価値観によるのでは…。堺 私は今、堺市が実施しているメンタルフレンドというボランティアに参加しています。これは不登校児の家庭を訪問して、家庭教師や話し相手になるというものです。大阪府の子ども家庭センターで実施されているメンタルフレンドには、1時間あたり1000円の手当てと交通費が支給されているんですが、堺市の場合、手当てはなし。しかし、不登校児に対してカタにはまった援助ではなく、より柔軟に接することができるといふメリットがある。ボランティア活動には、常にそうした側面があることを認識し、自分がどういうスタンスをとるか考えていかねばならないでしょう。



◆堺 豊史さん
大阪市立大学（関西福祉系大学救済グループ事務局）（生活科学部人間福祉学科3回生）

専門的アプローチにこだわる必要はない

吉田 すみれ会では近畿大学文化会から部費が支給されているので、学生の負担は年会費の10000円ぐらい。資金面での問題は今のところありません。

山口 それよりも、商経学部や理工学部など、福祉は専門外という学生ばかりが集まっているので、ボランティアに関して、何の専門的知識やノウハウもない。そんななかで、障害者へのボランティアを進めていくといいのかなという戸惑いや不安が常にあるのですが…。

井川 でも、福祉系学部の学生だからといって、専門的知識が豊富だとは言えませんよ（笑）。

木村 僕たち、社会学部の学生だから、世間ではボランティアの知識があると思われるようで、反対に難しいことを聞かれないか、どきどきしながらやっているんですよ（笑）。

三和 専門的知識より、むしろ素人さがボランティアの良さじゃないかしら。ボランティアはけつし



◆井川満裕さん
桃山学院大学（関西福祉系大学救済グループ）（社会学部4回生）

てプロの福祉職員の労働力の代替ではないはず。例えば私たちの「むうみん」でも、ボランティアが接することによって、思いがけず「この子はカラオケが好きなんだ」といったことが発見できる場合がある。これなどボランティアが施設の先生とは違う接し方をしたから、分かったことだと思うんです。福祉職員や保護者とはまた違う温かさ・親しみやすさをボランティアに感じてもらえたら、それでいいのでは…。だから、専門的知識や技術のあるなしに、特にこだわる必要はないと思います。井川 私も平時の活動に関しては、もちろんそれでいいと思います。しかし、震災のときなど真つ暗闇、手探りのなかでボランティア活動がスタートした。ああいう緊急時にどんなふうにボランティアが動けばいいのか、そんなことについて社会学部系の学部では、ボランティア論などを通し、もっと知識



手話劇を演じる大阪の大学「垂飛夢」



視覚障害児たちとサマーキャンプを楽しむ近畿大学「すみれ会」

を深めていく必要があるのではないかと思います。

秋山 確かに、震災を見ても分かるように、ボランティアといっても時期によってその役割と動き方は違ってくるわけですからね。必

問われる活動姿勢。自分のスタンスを認識しておくことが大切だ

絆の第一歩は「自分」を出すことから始まる

秋山 ところで、ボランティアでは常に対象者と向き合うわけですが、そこにおけるわれわれの姿勢というのは非常に大切ですね。そういう点で、相手の気持ちを理解

要などところに必要なボランティアを送るボランティアのコーディネートや、ボランティア全体の動きを掌握するスーパーバイザーを養成していくことがこれからは絶対に必要ですね。

したり、コミュニケーションをとる上で、求められることというところ。...

蜂谷 震災ボランティアでは、ボランティアしたことで、自分も被災者を理解したような気持ちになるのは思い上がりではないかと感じました。周りを見てみると、そんなことで被災者との間に問題が起きていることも結構あった。自分は被災していないということを、はつきり認識して関わるほうが、かえって問題が少ないのではないかと思います。

井川 確かに、被災者に安易に「頑張ってくださいね」と声をかけている風景をよく見かけましたが、相手の痛みを分かっている、ごく無責任な発言だと感じましたね。

堺 相手を理解することも大切ですが、信頼関係を築くには、まずは自分をさらけ出して、自分を理解してもらうことが大事ではないでしょうか。震災のとき、私は救済物資の直接配布に携わっていましたが、公園のトイレで一緒にな



◆山口貴行さん
近畿大学文化会社会福祉すみれ会
(商経学部経営学科1回生)

った人が「家は全壊してしもた。あきまへんわ」と話しかけてきた。そのとき私は何も言葉を返せませんでした。でも、物資を配ることで援助したい自分の気持ちが少しでも分かってもらえたら、それでもいいと思っています。

蜂谷 震災時のあの混乱のなか、1日だけでボランティアと被災者の間にいい関係が築き上げられたことはまずないでしょう。被災者の側にボランティアを受け止める余裕はなかったと思います。

堺 確かにそれは言えるでしょう。でも、「人間的な」活動をする場合、やっぱり自分というものが出ますから、それを押し殺して機械的に動くのではなく、相手が受け止める、受け止めないは別として、私は自分らしさというものを出して活動していきたいですね。

失敗を重ねながら、いい関係をつくっていく

秋山 震災ボランティアの方の発言が続きましたが、障害者へのボランティアをしている方々はどうか。



◆吉田太郎さん
近畿大学文化会社会福祉すみれ会
(理工学部建築学科2回生)



杉山 「明日、会議があるから、手話通訳をしてほしい」など、自分たちが考えている以上のことを相手側が求めてくる場合があり、困ることがありますね。

三和 私たちのサークルでは、まずは失敗を積み重ねながら、良い関係が作れたらいいと考えています。知的障害の方とのコミュニケーションというのは、うわつらだけの付き合いは通用しない。真剣に相手に向き合わねばなりません。



◆秋山智久さん
大阪市立大学生生活科学部
人間福祉学科教授

同志社大学大学院修了、米国・ミネソタ州立大学ソーシャルワーク大学院留学。メリーランド州立大学ソーシャルワーク大学院客員教授などを経て現職に至る。日本社会福祉学会理事、日本社会福祉士会副会長、日本ソーシャルワーカー協会理事。ボランティア歴は40年で、大阪市ボランティア活動懇話会座長、関西福祉系大学救援グループ代表も務める。著書に『福祉のマンパワー』（共編）、『ボランティア・ハンドブック』（監修）など。

秋山 残り時間も少なくなってきましたが、社会人とは異なる「学生ボランティア」ならではの特長というところ。

木村 お金はないけど、自由時間がたっぷりあることでしょうね。だから、フレキシブルに動くことができる。

井川 それに、若さや体力もあるから、機動力も存分に発揮できます。

秋山 そうですね。あなたなど、体力は特にね（笑）。

杉山 府大の社会福祉学部の場合、

自由時間・若さ・体力 が学生ボランティアの メリット

まずは行動を起こす そこから、ボランティアの楽しさが始まる

ん。でも、失敗を恐れていたら、いつまでも距離があいたまま。何もできないのです。幸い「むうみん」には、お付き合いしている団体と、発足以来15年間培ってきた

信用みたいなものがある。だから失敗しても、「そんなことぐらいでは崩れない関係を後で作ってほしい」といった大きな気持ちでぶつかっていきます。

ボランティアほど 人間の喜怒哀楽に 触れる活動はない

秋山 最後に自身の活動を振り返ってボランティアに関する感想など、何かあれば一言…。

福祉を勉強しているということ、近隣の福祉施設や団体から、必要とされる割合も大きいですね。

堺 児童関係のボランティアでは、年齢が近いというメリットもあると思います。自分たちがつい数年前に経験したようなことも少なくないから、対象者の気持ちがよく分かり、けっこう適切なアドバイスができるように思います。

山口 障害児を見ると、楽しかったりすると、ダイレクトに表情にあらわれるから、こちらもとてもさわやかな気分になれ、気持ちがいいですね。高校時代の友達の中には、ボランティアなんて偽善だという人もいるけど、いろいろ理屈を並べて批判する前にまず自らがやってみると言いたい。

杉山 僕の友達の中にも、ボランティアという「偽善ぶって」と揶揄する人がいるが、ボランティアはだれかに評価してもらうものではない。自分が面白かった、世界が広がったと思えば、それでいいと思います。

堺 そうですね。ボランティアとはもともとラテン語のボランティア、「意志」という意味から来ている。そういう点でも、ボランティアに取り組む際はあくまでも自分の意志を大切にしたいなと思いますね。

蜂谷 生き方に「何がいい」なんて決まっていらない。社会でいろんな人と接し、模索しながら自分の納得できる生き方を選んでいく。そんな自己発見の場がボランティアではないでしょうか。

井川 僕は、ボランティアほど喜怒哀楽が出る活動はないと思います。例えば仮設住宅に「おばあちゃん、どうですか」と訪ねていくと、最初はげんそうな、ときにはおこったような顔をされる。面白い話をしていると、そのうち笑ったり「ありがたや、ありがたや」と拝み出されたり、泣き出された

りすることも。これほど人間性に触れる活動はないと思いますね。

秋山 なるほどね。きょうは、皆さんから活発なご意見をいただき、どうもありがとうございました。最後にボランティアの根幹に触れるような、次のような詩を読んで終わりたいと思います。

生きてることは、
だれかに借りを作ること。
生きてることは、
だれかに借りを返すこと。
だれかに借りたら、
だれかに返そう。
だれかにそうしてもらったように、
だれかにそうしてあげよう。
生きていくということは、
だれかと手をつなぐこと。
つないだ温もりを忘れないでいること。
めぐり合い、愛し合い。
やがて別れの日、
そのとき悔やまないように、
今日を明日を生きよう。
ひとは一人で生きていけない。
ひとは一人で生きていけない。



「神戸元氣村」で救援活動について打ち合わせする生徒たち

延べ350人が被災地でボランティア活動

もし自分がその立場
だったらと考えられる
ようになりました

茨木市・大阪府立福井高校

まだ震災の爪痕もなまなましい昨年の2月11日にボランティアをスタート。これまで延べ約350名が被災地で、ボランティア活動を行った大阪府立福井高校。

当時の生徒会長・羽有聡さん（3年生）は、「テレビで神戸一帯が崩壊していることを知りショックでした。ときどき遊びに行っていた町だけに他人ごととは思えず、現地で何か役に立つことをしたかった。それで、生徒会でボランティアをやるうと決め、先生やPTAのみなさんにも相談したところ、学校をあげて活動することになりました」と取り組みのきっかけを話す。

混乱する被災地に大勢で押しかけるのはどんなもんだろう、というためらいもあったそうだが、報

道される惨状に手をこまねいてはいられなかった。

事前に現地のボランティアグループや社会福祉協議会と連絡を取り、人手の必要なところや受入れ可能な団体を調査。そして、第一陣を募ったところ、183名もの応募があったが、ほとんどの生徒がボランティアは初体験だった。意気込んではみたものの、不安も大きい。ボランティア経験のある先生たちから心構えをレクチャーしてもらい、被災者の立場になって行動することを確認し合った。

「すぐに申し込んだけど、いざ前日になったらめんどくさくなっちゃって……。でも、当日は遠足気分ワクワクしながら電車に乗りました。車窓を眺めていると屋根を覆う青いビニールシートが段々

目立つようになり、倒壊した家を見たときは、メンドくささもワクワク気分も吹き飛んで、『何か、やらなきゃ』って、気持ち引き締まりました」と、福葉依子さん（2年生）は正直に気持ちの変化を話す。テレビや新聞、雑誌で見ていたよりも、はるかにすさまじい被災地の様子を前に、生徒たちはしばし言葉を失った。御影公会堂横で、震災直後からボランティア活動に取り組み「神戸元氣村」と、救援物資配給所になっていた西宮球場、救援物資集積場の鳴尾体育館の三班に分かれて活動を開始。

「神戸元氣村」は、全国から続々と集まるボランティアを現地のニーズとコーディネート。被災者のニーズをきめ細かく把握し、必要なものを届けたり、困っている人たちを手伝ったりする活動をしていた。生徒たちは、「ローラー」として、避難所以外のテントや半壊家屋などで生活をする人たちを訪問。聞き取り調査を行った。

「被災者のみなさんに軽々しく言葉がかけられなくて、最初はすごく勇気がいりました。『苦労さ



車いすや視覚障害者の介助方法を生徒同士で練習



んやね」と笑顔で対応してください。逆に励まされたような気がします。震災以来、布団にくるまって寒さをしのいでいたおばあさんにガスコンロが欲しいといわれ、持っていくてもらうように手配したときはホッとしました」と話すのは山下美奈さん（3年生）だ。遅々として進まない復興に、被災者のイライラがつのっていた頃である。なかには感情的に「帰れ!」と叫ぶ人もいたそう。

活動後は、「もし自分がその立場だったら……と考えられるようになりました。いろんな方に出会って、災害から立ち直る人間のたくましさを見せてもらった」と川崎真理さん（3年生）。人の痛みがわかる心を育てよう、と人権教育に熱心に取り組んでいた福井高校は、平成5年度からボランティア協力校に。生徒たちは震災ボランティアを経験して、他の社会問題にも敏感になったようだ。今、ユネスコの世界寺子屋運動や交通遺児あしなが基金などへも関心を高め、協力の輪を広げている。

「車いすで遊びに行きたいけど、サポートしてくれる人が欲しい」という障害者の切実な声に応えようと、22年前にスタートした高槻市のボランティア・グループ「ありんこ」。

「好きなときにどこにでも行ける私たちと違って、車いすの人たちは外出する機会がほんとうに少ないんです。誰もが同じように、いろんな体験ができるようになればいいなって…。障害をもつ人もたない人も、一緒になって楽しみたい。発足当時のメンバーもそんな思いで始めたそうです」と同グループ副会長・中野由希さん（23歳）。

現在、ボランティア登録メンバーは、10〜20代の若者を中心に約30名。昨年は天王寺動物園の見学、



一日レクリエーションで、万博公園へ

若者から若者に受け継がれて20余年

自分も楽しみながら
“盛り上げたろ”って
ノリでやってます

高槻市・ありんこ



障害者とともに、箕面へハイキング

箕面へハイキング、ミナミのタウンウォッチングといった戸外での活動に加え、お菓子作りやクリスマス会などの交流会も行った。大きな行事には、メンバーの友達など「外ボラ」と呼ばれる助っ人も

多数参加する。若者らしく、パワフルでオープンな活動が「ありんこ」の特徴だ。また同グループの場合、障害をもつ人もメンバーとして登録。同会長の間井谷稔さん（34歳）も左手に障害をもっている。

「最初はボランティアを受ける側として、ありんこの存在を知ったんです。参加しているうちにいつの間にか逆の立場に…。自分のできることをするのがボランティアですから、障害の有無は関係ないんです」と間井谷さん。

「ありんこのプログラムはおもしろい」と人気が高い。それは、ボランティアが自己満足に陥らないように、きめ細かく情報収集を行っているからだ。例えば、行事のたびに感想を聞きアンケートを取る。それをベースに年間のスケジュールや内容を計画。メンバーがアイデアを出し合ってユニークな企画を練り上げる。当然、若者の感性がキャッチしたトレンドも満載されている。「自分も楽しみながら盛り上げたろ」ってノリでやってます」と副会長の三浦直記さん（21歳）は笑う。さらにメンバーたちは、救急法や介助の基礎講習も受け、障害をもつ人たちが安全に活動できるように配慮も。

「ミナミのタウンウォッチングも、みなさんの希望で実施したんです。道頓堀では大きなカニの看板や食い倒れの人形を見て喚声を上げる子、アメリカ村でウインド

ウショッピングに熱中する子。みんなの喜々とした笑顔を見ると、準備の苦労なんかどこかに吹き飛んでしまいます」と中野さん。

「ボランティアをして、たくさん感動をもらった」と話すのは、副会長の中川恵子さん（21歳）だ。

「箕面のハイキングでは、普段ほとんど歩かない知的障害の子が車いすを降りて往復8キロの道を踏破したんです。ほとんど歩かなかった子ですから、ご両親もボランティアもびっくり。人間って環境によって思いがけない力が生じるんだなって、感激しました」

活動の中から、障害者は与えられるばかりの存在ではなく、健常者が彼らから得るものも大きく、互いに学び合うことの大切さを知ったと、メンバーは口々に話してくれた。



クリスマスパーティーを楽しむ「ありんこ」のメンバーたち

白菊高校は西日本で唯一の衛生看護科の単独校。卒業生は看護婦として医療や福祉の現場で多数活躍している。授業では、病院・老

歌謡曲などの歌詞を題材に、手話に取り組んでいるのは、堺市にある府立白菊高校の手話部「白い鳥」の部員たち約100名。新入生歓迎会、文化祭、文化クラブの公演会などで手話コーラスを発表するほか、府立聾学校の生徒たちや地域の手話サークルとの交流を広げている。

また、クラブ活動としては、手話部の他、点字のマスター・点訳活動に取り組んでいる点字部、空缶回収や身体障害者作業所での活動に従事するボランティア部があり、全校生徒480名のうち3分の1以上がこれらボランティア関連のクラブ活動に携わっている。「看護実習に行くまでは、お年寄りや障害者と話す機会がほとんどな

ドリームズ・カム・トゥルーの「Love Love Love」酒井法子の「碧いうさぎ」など、流行歌にあわせ、指や手が動く。まるで歌の振り付けのような楽しい手話。生徒たちの生き生きとした表情がとても印象的だ。

人ホーム・身体障害者福祉施設・保育所などでの実習も多く、これらの体験学習を通して、高齢者や障害者への理解が深まるためか、生徒たちのボランティア意識は以前からきわめて高い。夏休みなどには、個人的に府社協や大阪ボランティア協会のボランティア・プログラムに参加する生徒も少なくない。



在宅ボランティア活動をしている2年生たち。障害者と一緒に買い物に

今まで学校と地域との結びつき

「お年寄りの話に耳を傾ける。話し相手になることで、喜ばれ、自分も人のお役に立てることができると分かる。そんなことが生徒自身の自信にもつながっている様子。ボランティア活動を通して、のびのびと物事に取り組めるようになった生徒も多いですよ。」



新入生歓迎会に向けて手話コーラスの選考をする部員たち

は必ずしも強いとは言えなかったが、「看護に関する豊富な人的・物的資源を生かし、高齢者との交流・介護サービスや学校にある介護用品の貸し出しなども行っていきたい」と、手話部顧問の台野先生は話す。

白菊高校では、平成4年度から府社協のボランティア協力校に指定され、年10万円の補助金を受けている。現在、この補助金は、ボランティア保険の加入、施設訪問の際の交通費などに使われているが、「学校ぐるみでボランティアをよりいっそう推進していくには、こうした経費の補助も必要です」と高桑先生は語る。財政的援助を確保していくことが同校に期待されていると言えらるだろう。



手話コーラスの練習に励む「白い鳥」の部員たち

看護科の特色を活かし積極的に活動

自信がつき、物事へのびのびと取り組めるようになりました

堺市・大阪府立白菊高校

柏原市

パソコン通信「柏原ふれあいネット」を開設

柏原市社会福祉協議会では、パソコン通信「柏原ふれあいネット」を開設しています。お手持ちのパソコンやワープロを社協のホストコンピュータと結んで、福祉・ボランティア関係の情報や地域の情報、催し物の情報などを入手してみませんか。仲間とメッセージをやり取りし、交流を楽しむことができます、電子掲示板や電子メールも用意しています。

アクセス番号／0729-72164

53

通信速度／300～14400bps

利用時間／24時間

利用料金／会費、利用料金は無料
必要なもの／通信機能付きパソコン・ワープロ

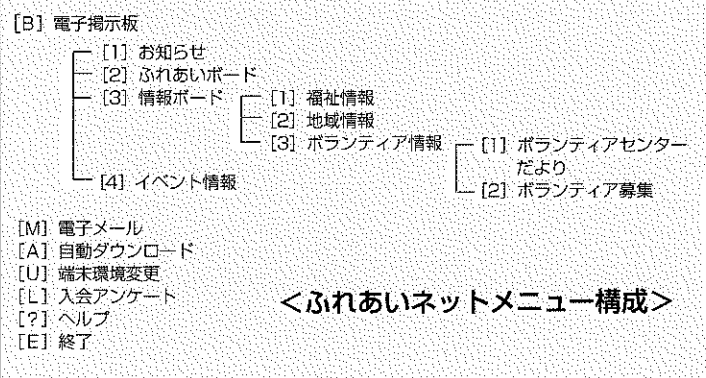
問い合わせ／柏原市社会福祉協議会

☎0729(72)1501

大阪狭山市

ボランティアハンドブックを発行

大阪狭山市ボランティアセンターでは、社会福祉法人格20周年を記念してボランティアハンドブックをこのほど発行しました。ハンドブックでは介護に重点を置き、実際に役立つさまざまな介護の情報や手作り介護用品の作り方などを掲載、また、昨年のボランティアサマースクールの様子を漫画で紹介



介しています。表紙には、ハンドブック編集委員の井田敬之助氏による同市の代表的建物「さやかホール」が描かれています。

ハンドブックを希望される方は、大阪狭山市ボランティアセンターまで。

☎0723(67)6601

豊中市

ボランティアのための中級セミナー

高まりつつあるボランティアへの関心・期待に応え、そのあり方、今後の役割など、さまざまな角度からボランティアについて学ぶ学習会。

実施日時／2月15日、22日、29日、3月8日、14日

午後1時30分～3時30分

場所／豊中市立福祉会館3階集会室

(阪急岡町駅下車、徒歩5分)
対象者／ボランティア活動や地域活動に関心のある方、定員60名
受講料／無料(4回以上の出席者には修了証あり)

問い合わせ／豊中市社会福祉協議会
ボランティアセンター(市立福祉会館内) ☎06(848)1000

第3回 豊中ボランティアフェスティバル

豊中市内のボランティアグループ間の親睦を図るとともに、さまざまなボランティア活動を紹介し、活動に対する市民の理解を促します。また、阪神大震災後の1年間の振り返り、震災の教訓とともに、震災支援活動を風化させない取り組みに臨みます。

実施日時／2月25日、午前10時30分～午後3時30分

場所／豊中市立ロース文化ホール

(阪急庄内駅下車)

内容／ボランティアグループの活動紹介、校区ボランティア部会・震災支援ボランティア活動のパネル展示、車椅子・手話・点字・対面朗読などの体験など

問い合わせ／豊中市社会福祉協議会
豊中ボランティアフェスティバル実行委員会 ☎06(841)9393

「ボランティア川柳」を募集

豊中ボランティアフェスティバルにちなみ、震災ボランティアをテーマにした川柳を募集しています。応募作品は選考の上、同フェスティバルで紹介しします。

テーマ／震災ボランティア

応募対象者／豊中市在住の人
応募方法／はがきに川柳(3句以内)

と住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、〒560 豊中市中桜塚2-28-7 豊中市社会福祉協議会ボランティアセンターまで

締切り／2月9日消印有効
問い合わせ／豊中市社会福祉協議会
豊中ボランティアフェスティバル実行委員会 ☎06(841)9393

心の交流をモットーに お年寄りの外出をサポート

大阪YMCA◆高齢者外出介助の会



外出ニーズに最適のボランティアが介助



代表・永井佳子さん

お年寄りに、より楽しく充実した日常生活を過ごしてもらうため、外出のお手伝いをするボランティア・グループ、高齢者外出介助の会。

「足腰が弱ると皆さん家に引込みがちになります。一人歩きが不安な方は、行きたいところがあってもつい我慢をされる。それではだんだん生活に張りが無くな

り、気持ちも弱ってしまう。もつと気軽に外出してもらい、いつまでも生きがいのある暮らしをしていただきたい。そんな思いで仲間と一緒に会を始めました。人ごとではなく、私もそうなったときに、こんなボランティアがあったらな」と思ってたんです」と代表者の永井佳子さん。

買い物に行きたい、展覧会に行きたい、お友達に会いたい、こんな思いは決してぜい沢ではないのだが、年を取ると特別なことになってしまふ。若い人や健康な人は、あたり前のようにやっていることだ。

高齢者の外出は、本人が大丈夫だと思っても、家族が心配して「やめたほうがいい」と止めるケースも少なくない。永井さんは、「アレもあかん、コレもあかんでは、言う方も、言われる方もお互いに気まずくなる。それに核家族化や働く女性が増えて、一緒に出かけたくても時間が取れなかったり…。お年寄りを家族だけで抱え込んでしまうより、第三者（ボランティア）の手を借りる術を知っていたら、案外円満にいくものなんです」と言う。

同会が発足したのは、94年10月。新しい組織だけに、まだまだ知られていないのが現状だ。今のところは、ボランティアの方が圧倒的に多く、各保健所や高齢者対象のセミナーなどで広報活動を積極的に行っている。

同会のシステムは登録制。登録をしておくで外出日の1週間前に連絡すれば、当日ボランティアが自宅と目的地の送迎をする。登録資格は、年齢制限はなく、歩行でできれば軽い痴呆があったり、持病があってもかまわない。一人暮らしはもちろん家族と同居の人も。同行するボランティアの交通費や昼食代などの経費は、常識の範囲内で登録者の負担となっている。

「ボランティアで大切なのは心の交流。信頼関係が生まれるように進めています。ボランティアはお年寄りの気持ちを第一に考え、その方の意思と一緒に行動するよ



グループの活動をアピールするメンバー

うにします。例えば、その方の通いなれている道や使い慣れている乗り物を使うようにし、ボランティアが押し付けがましくしないように最大限の心配りを行っています」

お年寄りの外出ニーズには、例えば、趣味の釣りや釣りに連れて行って欲しいとか、お花見をしたいといったものから、お墓参り、親戚訪問、もっと切実な病院通いまでさまざま。

ボランティア側は、主婦や定年退職した男性、学生、OLなど、また20代から80代まで幅広く多様な会員構成。

「幾つになっても、少々足が弱っても、私たちが一緒に歩きます。遠慮なくご連絡ください。お待ちしています」とお年寄りに呼びかけている。

●高齢者外出介助の会 大阪市西区土佐堀1丁目5-6 大阪YMCA国際・社会奉仕センター内
TEL/06 (441) 5598 受付/月・水・金 (10時30分～15時)

ボランティア
ズームアップVサークル

痴呆性老人のデイケアなど、地域福祉の原動力に

松原市◆寝たきり老人・痴呆性老人在宅介護ボランティア友の会



ボランティアが作った手作り料理で楽しい昼食が始まる

「リンゴの唄」「大楠公」など、床暖房がきいた明るい室内に、懐かしい童謡や唱歌が次々に広がる。

家庭的で和やかな雰囲気。「これは大正7年にできた歌やね」「ほんなら私の生まれた年と一緒やわ」など、お年寄りが軽い感想をもらすことも…。

痴呆性老人のデイケアにあたる、デイハウス松原「ファミリー」ここは「松原老人を支える家族の会」が中心となって運営する民間の自主団体だが、そこで専任の介



友の会のメンバーたち。左が会長の熱田さん

護スタッフとともに、高齢者の介助にあたっているのが、「寝たきり老人・痴呆性老人在宅介護ボランティア友の会」のメンバーたちだ。週5日、交替でデイハウスに詰め、昼食やおやつの準備、話し相手、リハビリなどの介助に携わっている。

会が誕生したのは昭和61年のこと。「ボケ老人を抱える家族の会（京都）」などで昭和50年代から活動が続けてきた田中恵美さんが、ホームヘルパーや特別養護老人ホームの寮母など介護の専門家、松原市社協のボランティアスクール

スタートした。

「当時はまだ相談窓口もなく、痴呆症のお年寄りを抱えて途方にくれている家族も少なくなかった。元氣な自分たちがお年寄りのお世話や介助に携わることによって、高齢者福祉の現状を見つめ、ひいては自らの老い方についても考える機会をもつ。そんな中で、高齢社会が少しでもより良い方向に向かっていたら…という、やむにやまれぬ思いがありました」と、田中さんは発足のきっかけを語る。

徐々に会員が増え、現在は51名に。30代から70代までと年齢も幅広く、男性や会社勤めの人もいる。冒頭で述べたデイハウス松原のほか、保健所での痴呆性老人のデイケア、老人センターで実施される高齢者の集いのお世話、講演会の開催などを展開。件数は減ってきているが、保健婦とともに寝たきりの高齢者宅を訪問し、入浴介助に携わったり、食事介助など在宅介護の援助も行っている。

「ボランティアという点、特別なことのように思われがちですが、肩肘張って臨む必要なんてないのでは…。食事の準備や話し相手などは、ふだんの生活でもやっていること。これなら自分もできると思っ」と、入会のきっかけを語るのは大平浩子さん。3年前から会長を務めている熱田光子さんは、「大雨でびしょぬれになりながら、依頼者宅を訪問すること

もある。なんでここまで…と思ったこともありました。でも、頼りにしてくださっている人がいる。それが私たちにとって、逆に気持ちの張りにつながっているんです」と話す。

最近では高齢者福祉の状況もかなり変化し、結成当時に比べると、松原市においてもホームヘルパーなど介護職員が増えてきた。「こうした方々と手を携えながら、ボランティアだからこそできる介護への関わり方をこれからは模索していきたい」と田中さん。

地域における高齢者福祉推進の原動力の一つとなつて活動を展開してきた同会。結成10年目という一つの節目を迎え、新たな展開を目指して、さらなる活動が期待される。



お年寄りと一緒に、なつメロや童謡を歌う

平成7年度

ボランティアコーディネーター・リーダー研修会

阪神大震災を契機に、活発化するボランティア活動。若者や会社員など、新たにボランティアを始めた人も少なくありません。今年9月には大阪で全国ボランティアフェスティバルも開かれます。こうしたボランティア機運に対応し、大阪府社会福祉協議会では、さらなる活動の飛躍と発展をめざし、以下のようにボランティアコーディネーターやリーダーのための研修会を開催します。皆様のご参加をお待ちしています。

- 日時 2月19日(月)、26日(月)、3月12日(火)、18日(月)
午前10時～午後3時。
- 会場 大阪社会福祉指導センター 5階ホール
地下鉄谷町線「谷町6丁目」駅(4号出口)
「谷町9丁目」駅(2号出口)下車、徒歩10分
- 対象者 ボランティアコーディネーター、ボランティアグループ
リーダー、ボランティア担当職員など。定員200名。

●研修内容

	日 時	研修テーマ	講 師
1	2月19日 (月) 10時～12時 13時～15時	ボランティアコーディネーターとアドバイザーの役割と課題 NPO支援法案について	桃山学院大学教授、ボランティアコーディネーター・アドバイザー研修プログラム研究委員会委員長 上野谷加代子氏 長寿社会文化協会常務理事 田中尚輝氏
2	2月26日 (月) 10時～12時 13時～15時	全国ボランティアフェスティバル成功のために 精神障害者の福祉課題とボランティアについて	大阪府社会福祉協議会ボランティア振興課長 山崎明彦氏 大阪府四條畷保健所精神保健福祉相談員 川本正明氏
3	3月12日 (火) 10時～12時 13時～15時	高校教育における福祉科とは 学校における福祉教育のあり方	岡山県岡山女子高等学校社会福祉科教諭 西村和正氏 東洋大学教授 一番ヶ瀬康子氏
4	3月18日 (月) 10時～12時 13時～15時	日本社会におけるNPOの役割 これからのボランティア活動を考える	大阪大学大学院国際公共政策研究科教授 本間正明氏 参加者による活動発表・交流会

- 参加費 2000円(1日のみの場合は500円)。参加費は当日受付けへ。
- 昼食 必要な方は1食1000円。参加申し込みの際に予約のこと。当日の注文はできません。
- 申込方法 参加申込書に必要事項を記入の上、2月15日(木)までに、大阪府社会福祉協議会ボランティアセンターへお送りください。〒542 大阪市中央区中寺1-1-54 TEL06-762-9471 FAX06-764-5374



第4回おおさかボランティアフェスティバルより